アイドルオタクのモガミサン〜ボイトレ〜

※こちらのシリーズは、霊能タレントである最上さんが推しの霊幻と結婚し、霊幻所有のタワマンに一緒に住んでいる生存ifとなります。

※

チャイムが鳴る。

もそもそと昨晩の残りのピザを面倒くさがって温めもせずに朝食として食べていた最上が、顔を上げた。

アイドルオタクのﾓｶﾞﾐｻﾝ〜ボイトレ〜

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=22042972

モ腐サイコ100, 最霊, 大霊能力者におめでとう

師匠総受け『では無い』、師匠愛されの最霊です。最さん生前ｉｆでアイドルオタク、師匠や中学生組がアイドル設定です。最上さん誕生日Webオンリー、『大霊能力者におめでとう』展示作品です。良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

アイドルオタクのﾓｶﾞﾐｻﾝ〜ボイトレ〜

チャイムが鳴る。
もそもそと昨晩の残りのピザを面倒くさがって温めもせずに朝食として食べていた最上が、顔を上げた。
「あー、いいよ。俺が出る。今日ボイトレなんだ。たまにはデカい声出さないとな、声量が落ちる」
「ちょっ、と。待ちなさい。着替えて出なさい」
霊幻は昨日最上が来ていた白いＴシャツをダボつかせて着ていて、小さめの灰色のボクサーパンツがその裾からチラチラ見えている。スラリと長くて白い、艶かしい素足が目に毒だ。
「えーっ？窮屈な服は集中出来ないんだけど……」
「それにしたって限度があるだろう。アイドルだろ、キミ。人の目は気にしたまえ。私が出迎えておくから」
「最近はアイドルより舞台俳優やってる方が多いけどな」
霊幻のミュージカル出演の仕事は増え続けている。
最上は肩をすくめて、霊幻を見送った。
初老のボイストレーナーを玄関まで出迎える。
「……霊幻くんは？」
「すぐ来る」
「悪いなじいさん、家まで来てもらって」
「霊幻くん、今日はどこでトレーニングするんだ？」
険しい顔のトレーナーに最上は内心首を傾げる。
「いつものスタジオ取れなくてさ〜。大丈夫だよ、めちゃくちゃ金かけて防音室に改装してあるから」
「……」
トレーナーと霊幻は一室を改造したスタジオに入って行った。霊幻がTikTokの撮影なんかを良くしてる部屋だった。
最上は朝食の残りを口に押し込み、テーブルを片付ける。
次の撮影でお札を映したいから作ってくれ、と言われていたので、小道具作りの準備を始めた。
（こういうの、何かあった時に勝手にスタッフがお守りにしたりす

るからな……それなりに効果があるものを作っておくか。神道……いや、陰陽道系で行こう）
最上は朱墨を擦る。
小筆に朱墨を含ませて、短冊に穂先を下ろそうとした瞬間。
「ラララララララララ〜♪」
霊幻の声が聞こえてきて、筆が止まった。
（相変わらず透明で心地よい声だ……じゃなくて）
防音室を貫通してきている。
（いいのか？これ）
ショート動画を撮影している時には歌声が防音室から漏れるなんて事はなかった。
オペラ歌手の本気の『デカい声』。その威力を最上は実感してしまう。
「Ha---llelujah! Ha---llelujah! Hallelujah! Hallelujah! Halle-----lujah!」
霊幻が喉のストレッチ曲を歌い出したら、もうダメだった。
心地よい歌声が最上の身体を満たしていく。推しの生歌だ、聴かないはずが無い。
はっと気がつくと、札にしようとしていた短冊にステージ上で踊る霊幻を落書きしてしまっている。
（これはいかん）
「新隆く……」
最上が立ち上がると同時に、チャイムが鳴る。
上の階のYouTuberだった。
「あの、すみません……お宅の歌声が録音に入っちゃって……」
「も、申し訳ない」
頭を下げる最上の後ろで、霊幻とトレーナーもペコペコと頭を下げている。
「やっぱり家じゃ無理か……」
ドアを閉めて、霊幻はスマホを取り出す。
「あ、もしもし店長？スタジオ部屋何処か空いてない？」
『だぁから、空いてるけど今日はダメっつってんだろ！！オーディション用のレコーディングしてるバンドがいるんだよ。お前の声は全部屋貫通するから録音に入っちまう！！』

「あー……だよな」
電話を切って霊幻は腕組みしてドアにもたれかかった。
「いっそ河川敷で歌うか……？」
「人が集まってしまうだろ。路上ライブの許可取ったか、って警察が来るぞ」
最上はちょっと考え込む。
「……心当たりがある」

最上は２人を乗せて車を走らせる。
「バブル崩壊前、地方で箱物が流行った時があった」
「箱物？」
「建物のことだ。美術館や劇場を公金で建てるのが流行った。あの劇場はそういうのの１つでな。山奥で雰囲気がある、と当初は持て囃されたが……事故が相次いでな」
「事故……」
「人目につきにくいし、入り込みやすかったから、自殺の名所になってしまったんだ。舞台の上で事切れる、というのが流行って、気味悪がって客は寄り付かなくなり、劇場は封鎖された。バブルが弾け、行政は解体費も出せなくなり、そのまま放置されている。まだまだ新しい劇場だからな、中は綺麗なものだよ」
「だ、大丈夫なのか？」
「私がついているんだ、何を恐れることがある」
肩をすくめる最上に、それはそうだけど、と霊幻はもごもご言った。
「……悪霊らしい悪霊はおらんのだよ、ここには」
車を劇場の前に止め、最上は独り言のように呟く。
「最期を舞台の上で、と決めた自殺者たちは、覚悟の上で死んだらしい。悔い無く、ほとんどが成仏してしまっている。追い詰められて死んだ者と違ってな。残っているのは、遊び足りない無邪気な霊たちだ。……自殺者が死後も苦しみ、現世に囚われていて欲しい、というのは、どちらかというと生者の望みだ。残された者の苦しみに応えて欲しいというエゴだよ」
「そういうもんか……」

「むしろ、場所的に山霊の方が厄介なぐらいだよ。しかし当然、私の敵ではない。安心して練習したまえ」
最上は手を翳して劇場の扉を全部開き、埃を追い出して外の空気を入れる。
すう、と霊幻は息を吸って。
『神々しい光の永遠の源よ、』
と高らかに歌い上げた。
誕生日を寿ぐ歌に、最上も、その場にいた霊たちも呆気に取られて霊幻を見つめる。
「……どしたの？」
「いや……別にいいんだが……場にそぐわないな、と思ってな」
「そう？だってさ、ここにいる霊たちは、死後を満喫してるんだろ。……そういう霊、前も聞いた事あるんだけどさ、モブから。そういう人たちにとって、死は第二の誕生日だろ。だから……レクイエムじゃなくて、こっちの方がいいかな、って思ったんだよ」
「……そうか」
最上は目を閉じて霊幻の歌声に耳を傾ける。

自分の欲望のために死を選んだ者への『おめでとう』

それはいつまでも、その場を満たし続けた。

おしまい。